2020.4.12 イースター礼拝「わたしは、あなたにこそ会いたかった」
ヨハネによる福音書２０：１１～１８

イースターの日を与えられました。礼拝する場所は離れていても、私たちは一人の主イエスさまに共に繋がっています。この朝も、同じ御言葉を聞き、ご一緒に祈りを合わせることによって、一つの民として、支え合いつつ、この時を歩んで参りましょう。

先週、関東地方に住む者たちに、緊急事態宣言が出ました。「どうしてもという時以外は、とにかくお家にいるように」ということです。一か月、努力せねばなりません。

今、私たちは、まことに不可解な現実のただ中にいます。新型コロナウイルス感染症という、新たな病気が世界中に広まり、多くの人の命が失われています。このウイルスは、症状が現れなかったり、軽症だったりする中で拡がっています。各地で病院のお医者さまが懸命に治療にあたられています。わたくしたちは、医療従事者の皆さまのために、真剣に祈りを合わせてまいりましょう。

それにしても難しいと思いますのは、このウイルスは、自分が無症状でも、他の人に感染させることがあるとも言われています。つまり自分が健康なのかどうか、誰にも分からないというのです。この感染症の影響がいつまで続くのか、見通しが立ちません。前途に差した影は広がる一方です。今、私たちは、前を見ても、「自分」を見ても、先のことの見通しが立ちません。

そんなイースターの今日、私たちはヨハネによる福音書の御言葉を示されました。復活されたイエスさまが、マグダラのマリアと出会われた出来事です。

最初にイエスさまのお墓に行ったのは、マグダラのマリアでした。ヨハネ福音書 20：1 のところにこうあります。**週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。**

マリアがお墓に行ってみると、お墓の入り口をふさいでいるはずの大きな石が、取りのけてあったというのです。

ユダヤのお墓は横穴（よこあな）です。マリアは中をのぞいて見たに違いありません。すると、そこにあるはずのイエスさまのご遺体が、なかったのです。彼女はからっぽのお墓を見て、誰かがイエスさまのご遺体を運び出してしまったと思いました。イエスさまが復活されたとは思わなかったのです。

マグダラのマリアを始め、イエスさまの弟子たちは、イエスさまが復活されることを信じて、そのことを期待して待っていた弟子がいたというようなことを、聖書は記していません。イエスさまは十字架に架かって死なれる前、弟子たちに何度も、御自身の受難、十字架、復活を予告されました。しかし、いざイエスさまが本当に十字架に架けられて死んでしまうと、弟子たちは、イエスさまが復活すると予告しておられたことなど、忘れていたのです。覚えていたかもしれませんが、誰も本気でそれを信じていなかったのです。マグダラのマリアもペトロもヨハネも、弟子たちの誰も、です。不信仰と言えば不信仰かもしれませんが、復活とはそういうことなのかもしれません。信じようがない。私たちの常識では、あり得ないこと、考えられないことだからです。

けれども、主は復活なさった。そして、私たちはこの方に出会い、この方によって生かされている。この証言と共に、主の教会は建ち、今も生かされ続けているのです。

ヨハネに戻ります。今日の 20：11 **マリアは墓の外に立って泣いていた**

マグダラのマリアはイエスさまのお墓の前に立ち続けて、泣いていました。彼女には泣くしか出来なかったのです。彼女は何度泣いたことでしょうか。イエスさまがゲッセマネの園で捕らえられたと聞いた時、彼女は泣いたかもしれません。ピラトによって十字架につけられることが決まった時。イエスさまが十字架を背負ってゴルゴタに向かって歩まれた時。イエスさまが十字架につけられ、手と足に釘を打たれた時。イエスさまが十字架の上で息を引き取られた時。イエスさまのご遺体が十字架から降ろされて、アリマタヤのヨセフの墓に納められた時。そして安息日に入り、イエスさまのいない土曜日、マリアは泣き続けていたことでしょう。

そして日曜日の朝、イエスさまのお墓に来ると、そこにイエスさまのご遺体は無く、お墓は空っぽでした。１３節にはマリアの悲しみの言葉が記されています。**「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」**「わたしのイエス様」が取り去られた。誰かがどこかへ運んでしまった。もしかしたら墓荒らしがお墓に押し入って、大切なイエスさまのご遺体を盗んでいったのかもしれない・・・。マリアはこの事態を受け入れられず、混乱と悲しみのあまり、泣くしかありませんでした。それは、最も弱っている人の姿です。悲しみが大きすぎるゆえに、いつまでも泣き続けるほかない人。「新しい道」など、見出せず、踏み出すことなどできない人。この時のマリアは、そういう弱さの極みの人でした。

愛する人の苦しみを前にして、何も出来ずにいる時、マリアのように、私たちも泣くしかありません。そして愛する人を失った時、どうしようもなく泣くしかありません。泣くしかない、この時に、どうしようもないと思っていた現実の向こうから、私たちの思いを超えた神様の業が始まっている。聖書はそう告げるのです。泣くしかない現実の前に立ちつくす私たちに、すべての人の目から、涙をぬぐう神様の救いの出来事がもう始まっている。それがイエスさまの復活なのです。

マリアは泣きながら、イエスさまのお墓の中をのぞいてみました。すると、お墓の中に今までとは違う光景がありました。白い衣を着た二人の天使が、イエスさまのご遺体があったところに座っていたのです。一人は頭の方に、もう一人は足の方に。そして泣くしかないマリアに向かって、天使は言いました。

13 節**「婦人よ、なぜ泣いているのか。」**これは、マリアに泣いている理由を尋ねているのではありません。泣いている理由は、大切なイエスさまが死んで、そのご遺体さえ無くなってしまったからだということは、分かっているのです。天使が告げているのは、「どうして泣いているのですか。もう泣くことはないのですよ。あなたを悲しませている、愛する人の死という現実は、もう敗れ去ったのですよ。だからもう泣かなくてよいのですよ！」ということです。しかし、マリアには天使が告げることの意味が分かりません。ですからマリアは、**「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」**と言いました。マリアはお墓を見ていました。イエスさまがいなくなったお墓を。しかし、天使たちはお墓の中から外を見ていました。そこには、お墓をのぞき込むマリアの後ろに、復活されたイエスさまが立っていらしたのです。天使たちは、マリアの後ろに立っている主を見ていたかもしれません。そして、「死を打ち破って、復活されたイエスさまがそこにおられるのに、なぜ泣いているのですか」と言ったけれども、マリアは気付

きません。

マリアは 14 節で、後ろを振り返りました。**こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。**マリアは立っていらっしゃるのがイエスさまだと分かりませんでした。そして 15 節。**イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」**マリアは復活のイエスさまと会話までしているのですが、お墓のお世話をしている園丁だと思って話をするのです。そしてイエスさまが**「なぜ泣いているのか。」**とおっしゃった意味も、分かっていません。しかし、16 節。**イエスが、『マリア』と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、『ラボニ』と言った。『先生』という意味である**　イエスさまが「マリア」と声をかけられて、マリアの名前を呼びました。そしてマリアの目が、開かれました。

愛する人の死という現実を前に、泣き続けるしかなかったマリア。イエスさまはこのマリアを、ご自分の復活の「第一の証人」としてお選びになって、出会われて、ご自身を現されたのです。マリアはお墓だけを見つめていました。絶対的に見える死の現実だけを見つめていました。けれども、復活の主は全く違うところに立っておられたのです。マリアの視線の外から、彼女に呼びかけられたのです。すなわち、「後ろ」からです。**後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。**

イエスさまは、おっしゃいます。「あなたの知らなかった道があるよ、“死の行き止まり”から開かれる道があるよ、暗闇を越えて光へ通じる道、死を越えて命へ続く道、絶望を越えて希望へと至る道が、ある。わたしは十字架の苦しみを経て、その道へと至り、その道を歩んでいるよ。**わたしは道であり、真理であり、命である**（ヨハネ 14：6）。そして、あなたに声をかけるよ！」主はそのように、マリアを呼ばれました。このイエスさまの愛が、マリアの信仰の目を開かせました。

20：16 **イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。**主は生きておられる。主はいつまでもわたしと共にいてくださる。マリアはこの信仰によって、死の中から引き上げられて、新しく生かされたのです。17 節の「**わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。**」という主のお言葉は、「イエスさまの目に見えるお姿」にこだわってしまうマリアを、復活の信仰へと招いておられるのだと思います。溢れる愛をもって、マリアの信仰の目を開かれたイエスさまは、この朝、私たちの名前も呼んでくださっています。「〇〇さん、わたしはあなたを大切に想っているよ。あなたの悲しみも、悔しさも、痛みも、すべてを知っているよ。」と。

イエスさまはマリアの後ろに立っていらっしゃいました。マリアがまったく見えない、気づかない場所です。イエスさまという方は、いつもそういう場所にお立ちになって、「後ろ」から私たちにも呼び掛けてくださるのです。私たちが思いもよらなかった場所、思いもよらなかった現実に、主は立っておられます。そして呼びかけてくださいます。「死がすべての結果ではない。」と。「死が終わりではない。神さまが与えてくださる命がある。一度は地上の死が必ずあるけれども、地上の死から始まる命がある。わたしはこの命によって生きて、ここからあなたを呼ぶよ！わたしはあなたにこそ、会いた

かったよ！」と。この主のお声が、自分にも語りかけられていると信じる時、私たちの絶望が希望へと、悲しみが慰めへと、通じていく道が、見えてくるのです。

一年前、教会の総会でお配りした文章で、このように書きました。「教会の歴史は、自動車のバックミラーのようなものです。運転する時、バックミラーすなわち過去・歴史を確認することが大切です。それは、前進するためのバックミラーです」。私たちは、今、先の見えない現実の只中に置かれています。前を見ても何も見えてこない、そんなわたしたちに、イエスさまは後ろから、お語りになっておられるのです。私たちの後ろには「過去」があり、「歴史」があります。

先週も少しお話しましたが、感染症の脅威は、過去の歴史にもありました。1527 年、マルチン・ルターのいた町ヴィッテンベルクや近隣の都市を、ペストが襲いました。ルターの手紙に「死に至る病ペストから逃げることは許されるか」という手紙があるそうです。ルターは考えなしに自らを危険にさらすよう促しているわけではありませんでした。手紙の中では二つの判断基準が絶えず争点になっていました。一つは自分の命を尊重すること、そしてもう一つは、困窮している人の命を尊重することです。「神さまは、わたくしたちに、体を大切にするよう任せておられる」ということを、ルターは聖書から解き明かしました。最終的に彼は、ペストから逃げるか留まるかの判断は、人々にゆだねました。彼は聖書の祈りと瞑想を通して、最善の信仰的判断にたどり着けることを信じていました。

そして、病人を助ける働きは、義務感ではなく恵みから生じるものだと言って、ルター自身は病気で死にかけている人に仕えるため、ヴィッテンベルクに残ったのでした。彼は、「キリストご自身の世話をするように、病人を世話すること」を大切にしたそうです。ルターはこのように書いています。「だからわたしは、ここに留まります。人々がひどい恐れに捕らえられているので、わたしはここに留まることが必要です。・・・キリストも、ここにいてくださるので孤独ではありません。罪を生み出す『年を経た蛇』が、どんなにキリストのかかとを砕いても、キリストが勝利を治めて下さいます」

このあと歌います讃美歌 21-３７７番は、ルターが作詞・作曲した讃美歌です。ヴィッテンベルクの大学は閉鎖され、多くの教え子たちや同労者たちが死んで行った中、1529 年につくられたと言われています。私たちは宗教改革の歌としていつも歌いますが、ペストとたたかった者としても、ルターがこの歌を歌ったとも思われます。この讃美歌は、先ほど交読した詩編４６編**「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」**の御言葉を賛美する歌です。恐れと不安のただ中で、御言葉を握りしめて、ルターがつくった讃美歌です。私たちプロテスタント教会の歩みは、いつの時代も、恐れと不安の只中で、御言葉を握りしめて、神さまを賛美し、礼拝していくのです。

二千年前のエルサレムと五百年前のヴィッテンベルク、そして今日（こんにち）の私たちが重なります。東京都の自粛要請、「緊急事態宣言」。私たちはお家にいる時を過ごします。この時を、聖書を読み、祈り、黙想する、「修養会」の時といたしましょう。「修養会」は英語で「Retreat　リトリート」です。「一度退却して姿勢を整える」という意味があります。高く飛び上がるには、一度かがまなければなりません。遠くへ飛ぶには、一度退かなければなりません。今は、Retreat の時。今、私たちに求められているのは、ウイルスへの不安や恐れに打ち勝っていかねばならないという悲壮な決意ではあ

りません。私たちの決意などはすぐに破綻します。大事なのは私たちの決意ではなくて、イエスさまが、私たちのために十字架にかかって死んで下さり、そして復活して永遠の命を生きておられるのだという事実です。そのことを、Retreat しながら聴き続けましょう。

そして Retreat の時を経たら、マリアのように、告げ知らせていきましょう。20 : 18　**マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。**

十字架によって私たちを贖い、復活によって私たちに永遠の命に生きる希望を与えてくださる主と共に、キリストご自身のお世話をするように、お家の人と過ごしながら、この１週間も過ごして参りましょう。

（祈り）よみがえりの主イエスさま、あなたのご復活を祝うイースター礼拝をささげることができました。感謝いたします。十字架につけられたあなたは、お墓に葬られましたが、何者も、あなたをそこにとどめ置くことはできませんでした。あなたはサタンを退け、死に打ち勝ち、復活されました。十字架によって、私たちを贖い、あなたのご復活によって私たちに永遠の命に生きる希望を与えて下さいました。イースターの喜びのうちに、私たちは新たな歩みを始めようとしていましたが、新型コロナウイルスが全世界で発生しました。世界中の教会で、精いっぱい喜び、精いっぱい神さまを賛美して歌い、互いに顔を合わせて笑い合い、語り合うことが、またできるようにして下さい。病気の治療にあたっておられる医療従事者の皆さまをお守りください。どうか感染拡大が止まり、治療方法が１日も早く見つかりますように。復活の主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。